

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

見えないことば、聞こえないことば

著者	那須 紀夫
雑誌名	神戸外大論叢
巻	67
号	3
ページ	31-57
発行年	2017-11-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00002148/

見えないことば，聞こえないことば*

那須紀夫

1. はじめに

1.1 見えない／聞こえないけれども存在するもの

周りの世界を主に五感に頼って把握している私たちは、直接知覚できるものは存在するものであり、そうでないものは存在しないものと考えがちである。だが現実には、知覚の外にありながら多くのものが存在する。身近なところでは紫外線や赤外線などがその一例である。人間の目はある種の光線を知覚できるが、それよりも波長が短い紫外線や波長が長い赤外線は知覚できない作りになっている。感知できないが存在はするというこれらの光線の性質は、赤外線センサーやテレビのリモコンなどの技術に応用されている。

言語にもこれに似た現象が存在する。本稿では、発音はされない（したがって聴覚では知覚できない）けれども文法的あるいは意味的に何らかの役割を果たす語句や構文を扱う。これらは普段言語を使うときに目に見える形で（または耳に聞こえる形で）産出・認識されることはないが、その存在が文法の別の原理や現象を用いて間接的に裏付けられる類いのものである。

本稿では主に二つのテーマを取り上げる。一つは、言語には発音されない語が存在し、それらが文法的・意味的な役割を果たすということ。もう一つは、文には表に現れることのない別の語順があり、我々が実際に使う文はその語順を変形させることによって作られるというものである。以下、それぞれについて概要をкаいつまんで説明する。

1.2 発音されない主語

次の (1a) の Mary のように、不定詞述語が表す行為の主体となる人や物に相当する語句を「不定詞の意味上の主語」という。不定詞の意味上の主語は、(1b) に見られるようにそれが表だって現れなくてもよい場合もある。

* 本稿は英語学の基礎科目で使用するテキストを意図して書かれたものである。本稿を故三間英樹教授に捧げ、ご冥福をお祈りします。

- (1) a. John expected Mary to eat five apples.
 b. John expected to eat five apples.

不定詞述語の主語と主節の主語が異なる場合には, (1a) のように不定詞の主語を明示する。一方, (1b) のように, 同一である場合には明示する必要がない。

ここで考えてみたいのは (1b) のようなケースである。この文の不定詞を含む部分の構造に関しては, 二通りの分析が可能である。

- (2) a. John expected [to eat five apples].
 b. John expected [(John) to eat five apples].

一つは (2a) のように *expect* と *to* の間には文字通り何もないとする分析で, 見たまま聞いたままのものが文の構造であるとする立場である。もう一つは, 文の構造は必ずしも見たまま聞いたままの形をしてはいないと考える立場である。(2b) に即して言うとは, *expect* と *to* の間にはたとえ発音されなくても不定詞の主語に当たる要素が置かれていると考えるのである。(2b) で丸カッコに入っている *John* がそれに該当する。本稿では, このうちの二番目の見方が言語の実態を反映していることを述べる。すなわち, 言語には発音されない語が存在するということである。

1.3 隠れた語順

英語の疑問文では, 疑問詞が文頭に置かれる。次の対話を見てみよう。

- (3) A: What are you reading?
 B: I am reading a magazine.

疑問詞が文頭に置かれる (3A) の語順はどのようにして作られるのであろうか。次の二つの可能性を考えてみよう。一つ目は, 疑問詞 *what* が始めから文頭に置かれているという考え方である。もう一つは, 最初に疑問詞を動詞 *reading* の目的語の位置に置き, そこから文頭に移動させるという考え方である。前者はいわば見たままの語順であるが, 後者の場合には表に現れる語順とは別の語順があり, 移動操作によって表層の語順が作られるというプロセスが関係していることになる。本稿では, 一見複雑なステップを踏む後者が言語の実態であることを見てゆく。

隠れた語順からスタートして語句を移動することによって作られる構文は,

疑問詞を使った疑問文に留まらない。(4a, b) のペアもまた表面的には別々の語順であるが、後述するように、根底にあるのは (4a) のような語順であり、(4b) はそこから「ピザを」を文頭に移動させて出来上がった文である。

- (4) a. ジョンがピザを食べた。
b. ピザをジョンが食べた。

(3A) と (4b) の元になる別の語順 — すなわち (3B) と (4a) — は、それ自体が実在する語順である。しかしながら、元になる語順が実在しない場合もある。例えば次のような場合である。

- (5) a. The boys will write a book.
b. will the boys write a book.

本稿では、(5a) が (5b) から the boys を移動させることによって作られることを示す。(3)(4) に挙げた例と違って、(5b) は平叙文としては実在しない語順である。そのようなものが (5a) の背後にあるとしたら、それはどうやって証明されるのだろうか。

最後に、(6) の文で John と honest の間で is の移動が起きていることを論じる。

- (6) John is honest.

(3)-(5) と違って、ここでは元になる語順と表出する語順が一見全く同じ (“John is honest”) である。だが、言語には一見何も起こっていないように見える場合でも、構造の変化が起こることがある。本稿の締めくくりとなるのは、そういう話である。

1.4 まとめ

これまで概説してきたように、言語には目に見えない、耳で聞くことのできない要素や語順が存在する。ただし、ここで注意すべきことがある。視覚や聴覚で捉えられないものが存在すると主張するのは自由であるが、その場合には、その存在を証明する何らかの客観的な傍証が必要となる。そうでないと、ちょうど裸の王様の逸話のように、要はその主張を信じるかどうかという信念あるいは好みの問題になってしまい、主張の真偽を確かめることが不可能になるか

らである。無形の要素や構造、システムを発見し可視化する試みは、文法研究の中で中心的な位置を占めるものである。どのような道具と方法を用いて見えないもの、聞こえないものを炙り出すのか。以下の各セクションではその一端を披露したい。

2. 発音されない語

本節では有形の(＝発音される)不定詞の意味上の主語がない文を取り上げ、外見上主語に相当する要素が存在しない場合でも、無形の(＝発音されない)主語要素が文中に現れることを見る。特に、無形の要素を探知してその存在を立証する手順と方法について述べてゆく。その第一歩として、文を構成する主要な成分である述語と項について説明する(第 2.1 節)。次に両者の意味関係のあり方を決定する「 θ 基準」と呼ばれる文法原理について説明し、不定詞節における無形の主語の存在がそこから導き出されることを示す(第 2.2 節)。最後に、 θ 基準以外の全く別の現象からも無形主語の存在が立証できることを述べる(第 2.3 節)。

2.1 述語と項の意味関係

動作や出来事、あるいは状態などを述べる語を述語と呼ぶ。述語は文を作る上で必須のものなので、これが脱落していると文が成立しない。

(7) a. John caught a beetle.

b. *John ____ a beetle.

述語のほかにも文を成り立たせる上で必要不可欠な成分がある。そのような成分のことを項と呼ぶ。(7a) を例にとると、John や a beetle がそれに当たり、これらは述語が表す行為や出来事に関与する人や物を表していて、述語と同様、省いてしまうと文が不適格になってしまう。¹

¹ ちなみに、文には述語や項のような必須要素に加えて、二次的な役割を果たす成分も現れることがある。次の文の yesterday や in the kitchen のように、出来事が起こった時や場所を表す語句がそれに該当する。これらは付加部と呼ばれる。

(i) John ate an apple yesterday in the kitchen.

述語や項とは対照的に、付加部は随意的な成分である。したがって、(9a) のようにこれらが欠けていても文は成立する。

- (8) a. *___ caught a beetle.
 b. *John caught ___.

述語と項の間には何らかの意味的な関係が存在する。次の例を見てみよう。

- (9) a. John ate an apple.
 b. *An accident ate an apple.
 c. *A good idea ate an apple.

動詞 eat の表す「食べる」という行為は, John のように意思を持った者のみが主体的に行うことのできる行為である。したがって, an accident や a good idea のような無生物は eat の主語としては不適切である。(9a) の John のように意図的な行為の主体者を表す項は, 動作主 (agent) と呼ばれる。一方, 目的語になる項は eat という行為によって影響を受けるもの, すなわち主題 (theme) を表す。必ずしも意図を持つものだけが捕まえる行為の対象になるわけではないため, 例えば (9a) の an apple のように, 無生物も主題項になることができる。

「動作主」「主題」といった, 項が持ちうる役割のことを意味役割 (thematic role) という。² 述語がとりうる項の数と役割の種類は, 述語ごとに異なる。

- (10) a. John is running.
 b. An accident occurred.
 c. John caught a beetle.
 d. John gave Mary a ring.

² 意味役割は述語と項の間に成立する意味関係を分類したものなので, その種類と数について絶対的な定説があるわけではない。例えば本稿で「主題」と呼んでいる項に対して, 述語の行為の影響を受ける者という意味で「被動者」(patient) という名称を与える場合がある。“John destroyed the car.” という文の the car のように destroy という行為によって形状などが変化する場合には, 行為の影響が明白なので被動者という名称の方がより適切かもしれない。しかし, 本文の例文 (10b) の主語である an accident などのように, 自然発生的な出来事に関わるものの場合には, 主題という呼称の方が相応しいだろう。そうすると, 主題だけに統一せず, 主題と被動者という二つの役割を設定することも考えられるし, さらにこれを細かく分類することも不可能ではない。言語事実をより精密に記述するには, 意味役割をより詳細に分類するのが有効かもしれないが, 本稿の趣旨からは外れるので, 意味役割の種類と数についてはこれ以上踏み込まないでおく。

(10a, b) から分かるように、動詞 *run* と *occur* は項を一つだけとるが、*run* の項が意図的行為を行える動作主であるのに対して、*occur* の項は意図を持つ主体ではなく、主題の役割を持つ。(10c) の *catch* は動作主と主題の二つの項をとる。(10d) の *give* はいわゆる二重目的語をとる動詞であり、動作主 *John* と主題 *a ring* に加えて、授与する相手である *Mary* という三つの項を持つ。通常、授与の相手を表す項が持つ意味役割は着点 (goal) と呼ばれる。以上をまとめると、次のようになる。

- (11) a. *run*: < agent >
 b. *occur*: < theme >
 c. *catch*: < agent, theme >
 d. *give*: < agent, goal, theme >

述語が持つ項の数とそれぞれの項の意味役割を (11a-d) のようにリストとして指定したものを項構造と呼ぶ。

2.2 θ 基準

述語と項の間に成立する意味関係を、やや比喩的に意味役割の授受関係と捉えてみよう。つまり、述語は項に意味役割を付与し、項は述語からその役割を付与される、と捉えるわけである。この考え方を採ると、(12a) の動詞 *run* はその項である *John* に動作主の役割を付与し、(12b) の動詞 *catch* は *John* と *a beetle* という二つの項にそれぞれ動作主と主題の役割を付与することになる。

- (12) a. John is running_{< agent >}
 ↑ ↓
 b. John caught_{< agent, theme >} a beetle
 ↑ ↓ ↓ ↑

これを項の側から見ると、(12a) の主語項 *John* は動詞 *run* から動作主の役割をもらい、(12b) の *John* と *a beetle* は動詞 *catch* からそれぞれ動作主と主題の役割をもらうことになる。

意味役割の授受は過不足なく行われる必要がある。次の例を見てみよう。

- (13) a. **John* polished ____.

b. *___ polished her shoes.

動詞 *polish* は動作主と主題の二つの項をとる。(13a) ではこのうちの主題の役割を受ける項が欠落しており, (13b) では動作主の役割を受ける項が欠落している。意味役割の授受関係の観点からこれを捉え直すと, (13a) では *polish* が本来付与すべき主題の役割を, (13b) では動作主の役割を付与できていないことになる。述語が本来付与すべき意味役割を全て付与しきれていないと, 不適格な文ができてしまう。この観察に基づいて, 次のような規則を立てることができる。

規則① それぞれの意味役割は項に必ず付与されなければならない。

今度は項の側から考えてみよう。次の文はどこが問題なのだろうか。

(14) *John polished Mary her shoes.

動詞 *polish* は二つの意味役割（動作主と主題）を項である *John* と *her shoes* に付与する。ところがこの文にはもう一つ, *Mary* という名詞句が現れている。動詞が持つ意味役割は既に全て付与されてしまっているのだから, *Mary* は何の役割も持てないことになる。この文が不適格であることは, 述語が意味役割を全て付与せねばならないだけでなく, 項になりうる成分もまた, 述語から意味役割を付与されねばならないことを示している。これを次の規則にまとめてみよう。

規則② それぞれの項は意味役割を必ず付与されなければならない。

付け加えると, (14) が不適格であることは, 例えば主題の役割が *Mary* と *her shoes* の両方に付与されると考えることもできないことを示している。つまり, 一つの意味役割は一つの項にのみ付与できるのであって, 同時に二つ以上の項に付与することはできないのである。これに基づいて, 規則①を次のように修正する。下線部分が修正箇所である。

規則①' それぞれ意味役割は一つの項にのみ, 必ず付与されなければならない。

同様に, 項が述語からもらえる意味役割も一つに限定されている。次の文は

「ジョンが自分を殴った」という意味にはならない。

(15) *John hit.

動詞 hit は動作主と主題の二つの項をとる。「ジョンが自分を殴った」という場合には動作主と主題が同一人物になるので、(15) で hit がこの二つの役割を John に与えたと考えてもおかしくないのだが、言葉の表現としては不適格になってしまう。同じことを言いたければ、再帰代名詞を使って (16) のように表現する必要がある。

(16) John hit himself.

以上の話を踏まえると、規則②を次のように修正する必要がある（下線部分が修正箇所）。

規則②' それぞれの項は意味役割を一つだけ必ず付与されなければならない。

ここまで述語と項の間に成り立つ意味役割の付与関係をみてきたが、これまでに立てた二つの規則①' と規則②' をまとめたものを θ 基準（シータ基準）と呼ぶ。

(17) θ 基準

それぞれ意味役割は一つの項にのみ、必ず付与されなければならない、
それぞれの項は意味役割を一つだけ必ず付与されなければならない。

ギリシャ文字 θ （シータ）は、意味役割に該当する英語の用語 thematic role の冒頭にある th に相当する。このため意味役割の付与に係る制約を θ 基準と呼ぶのである。本稿でも以後この名称を用いることにする。

θ 基準は無形の意味上の主語の存在を立証する上で重要な役割を果たす。ここで (1b) の文を再考してみよう。ここでは (18) として再掲してある。

(18) John expected to eat five apples.

問題は、不定詞 to eat の意味上の主語として無形の語を想定する必要があるかどうかということであった。上で見た θ 基準を基に、不定詞節内に何らかの主

語要素が必要であることを演繹的に導き出してみよう。

この文に出てくる二つの述語 *expect* と *eat* の項構造は次のようになる。

- (19) a. *expect*: < agent, theme >
 b. *eat*: < agent, theme >

(18) では *expect* が持つ動作主の役割は文の主語 *John* に、主題の役割は不定詞節に付与される。³ 不定詞 *to eat* は目的語 *five apples* に主題の役割を付与する。では、動作主の役割はどのように付与されるのだろうか。不定詞 *to eat* の意味上の主語は主節の主語 *John* であるから、*John* が *eat* という行為を行う主体、すなわち動作主ということになる。そこで、(20) のように *eat* が持つ動作主の役割が主節の主語 *John* に直接付与されると考えてみてはどうだろうか。

(20) *John expected*< agent, theme > [*to eat*< agent, theme > *five apples*].

この考え方には実は問題がある。*John* が *expect* と *eat* の二つの述語からそれぞれ意味役割を付与されることになり、 θ 基準に違反してしまうからである。

(18) が適格文であることは、この文が θ 基準に適合していることを意味する。ここに不定詞節の内部に意味上の主語として無形の語を想定する理論的な根拠がある。次に示すように、不定詞節に *eat* の動作主の役割を付与される無形の語があれば、 θ 基準違反は起こらず、この文が適正であることが正しく導き出せるのである。(不定詞の意味上の主語となる無形の語は通常 *PRO* という記号で表記される。これは *pronoun* (代名詞) という用語に由来する。本稿もこの慣例に従う。)

(21) *John expected*< agent, theme > [*PRO to eat*< agent, theme > *five apples*].

2.3 同節要素条件

上で導入した無形代名詞 *PRO* の存在は、 θ 基準だけでなく、他の文法原理

³ 意味役割が特定の語句ではなく節全体に付与されるというのはやや分かりにくいかもしれないが、不定詞節を代名詞 *it* で置き換えてみると、納得できるであろう。

(i) *John expected it.*

を使っても探知することができる。本節では、同節要素条件 (clausemate condition) という原理から PRO の存在を導き出してみよう。この条件が関係する文法現象は、再帰代名詞、叙述名詞、および副詞 **together** の分布である。

手始めとして、英語の再帰代名詞の分布について考えてみよう。再帰代名詞には幾つか際立った特徴がある。まず一つは、文中に先行詞と呼ばれる要素を必要とすることである。次の例を見てみよう。

(22) a. John criticized himself.

b. *Himself likes apples.

(22a) を例にとると、再帰代名詞 **himself** は主語である John を指す。この場合、John は **himself** の先行詞であるという。一方、(22b) のように、先行詞が出てこない文では再帰代名詞を用いることができない。

再帰代名詞の二つ目の特徴は、人称・数・性が先行詞と一致せねばならないことである。次の文を (22a) と比較してみよう。

(22) c. *John criticized { myself / yourself / themselves / herself }.

まず、先行詞として機能する John は三人称の表現なので、一人称や二人称の再帰代名詞 **myself** や **yourself** は使うことができない。次に、**themselves** が使えないことは、先行詞と再帰代名詞の間に人称だけでなく数の一致も必要であることを示している。John も **themselves** も三人称の表現だが、前者が単数であるのに対して後者は複数の表現である。最後に、**herself** が使えないことは、再帰代名詞の性と先行詞の性が一致しなければならないことを示している。このように、再帰代名詞には、人称・数・性の三つの特徴が先行詞と一致していることが求められるのである。

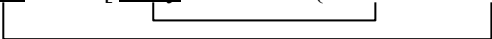
三つ目の特徴に移ろう。再帰代名詞が従属節の中に現れている次の例を見てみよう。従属節は角括弧 [] で示されている。

(23) a. *John wants [Mary to criticize **himself**].

b. John wants [Mary to criticize **herself**].

(23a) では、文の主語である John と再帰代名詞 **himself** はともに三人称単数男性の特徴を持っているが、この文は不適格である。代わりに (23b) のように

herself が用いられていれば適正な文になる。⁴ この二つの文は再帰代名詞の部分だけが異なっている。つまり, どの再帰代名詞が使われるかが文の正否を決定する要因になっている。⁵ この違いを分かりやすくするために, 再帰代名詞と先行詞を線で結んでみよう。

- (24) John wants [Mary to criticize { herself / *himself }].
- 

Mary と herself が同じ従属節の中に入っているのに対して, John と himself の間の距離はずっと長く, 両者は別々の節に入っている。

これまで述べてきた三つの特徴を統合すると, 再帰代名詞の分布は次のような条件に従うことになる。

- (25) 再帰代名詞は人称・数・性が一致する先行詞を同じ節の中に持たねばならない。

この条件を念頭に置いて, 次の文を考えてみよう。

- (26) John didn't want [to criticize himself].

この文に現れる再帰代名詞 himself の先行詞になっているのは文の主語 John である。しかし, この二つは別々の節に入っているため, (25) の条件を適用すると (26) が不適格な文になるという誤った予測をしてしまう。だが, 次の表示のように不定詞節の中に不定詞の意味上の主語になる無形代名詞 PRO が存在するならば, この文が適格であることを正しく説明できる。

⁴ (23a) を修正するもう一つの方法は, 再帰代名詞の代わりに通常の人称代名詞 him を使うことである。この場合の him は John を指してもよいし, 文脈によって与えられる別の男性を指していてもよい。

(i) John wants [Mary to criticize him].

(22a) と (i) の対立は, 再帰代名詞と通常の人称代名詞の分布が異なる条件に従うことを示している。人称代名詞の分布を決める条件の詳細については, 本題から外れるのでここでは論じない。

⁵ このように一か所だけが異なっていて, かつ文の正否が対立しているデータのペアを最小対と言う。

(27) John didn't want [PRO to criticize himself].

この PRO は John と同一人物を指すので、三人称単数男性の代名詞であると考えられる。これが同じく三人称単数男性の特徴を持つ himself の先行詞として機能しているため、(25) の条件が順守されるのである。

再帰代名詞と先行詞のように、一致する二つの要素が同じ節の中に現れる（現れなければならない）現象を同節要素現象（clausemate phenomenon）と言う。次に挙げる叙述名詞が現れる構文も同様の現象である。

- (28) a. Bill and Mary want [John to be { a linguist / *linguists }].
 b. John wants [Bill and Mary to be { *a linguist / linguists }].

Be 動詞に後続する名詞を叙述名詞という。⁶ 叙述名詞は同じ節にある主語と数が一致しなければならない。(28a) の a linguist は不定詞節の主語 John と一致している。この場合に複数形の linguists を使うことができないことから、叙述名詞が上位の節の主語 Bill and Mary とは一致できないことが分かる。(28b) では複数形の linguists が選ばれるが、これは不定詞節の主語が Bill and Mary という複数の人物を指す表現だからである。この例もまた、叙述名詞が同じ節の主語と一致しなければならないことを示している。

副詞 together も同節要素条件に従う語である。この副詞は複数の人物による共同の行為を表す。

- (29) a. *Bill and Mary want [John to work together]
 b. John wants [Bill and Mary to work together].

(29a, b) とともに、Bill and Mary という複数の人物を指す表現が文中に現れているが、それが主節に現れている (29a) が不適格であるのに対し、不定詞節に現れている (29b) は適格である。このことから、副詞 together は同じ節の中に複数形の要素を必要とすることが分かる。

叙述名詞や together も再帰代名詞と同じ分布条件に従う現象であることを考慮すると、これらの要素の分布もまた、不定詞節の中に無形の主語代名詞 PRO が存在する傍証となることが予想され、事実その通りになっている。次のデータを見てみよう。

⁶ 学校文法のいわゆる五文型のうちの SVC 文型で主格補語となる成分に相当する。

- (30) a. John and Bill wanted [to be **linguists**].
 b. John and Bill wanted [to work **together**].

叙述名詞 *linguists* および副詞 *together* はともに同じ節の中に複数形の名詞句を必要とするが, (30a, b) では主節にそのような名詞句 *John and Bill* が存在する一方で, 不定詞節には存在しない。それにもかかわらずともに適正な文になっていることから, これらの文は不定詞節の内部に *John and Bill* と同一の二人の人物を指す無形代名詞 *PRO* を意味上の主語として持つ, 次のような構造をしていると考えられる。

- (31) a. John and Bill wanted [*PRO* to be **linguists**].
 b. John and Bill wanted [*PRO* to work **together**].

2.4 まとめ

本節では, 不定詞述語と主節の述語が主語を共有する場合, 不定詞節の内部に不定詞の意味上の主語として機能する無形の代名詞要素 *PRO* が存在することを見た。不可視要素の存在は様々な文法的なテストによって間接的に探知できる。本節では, 不定詞構文が述語と項の意味関係を司る一般原理である θ 基準に適合するためには, *PRO* の存在が不可欠であることを示した。さらに, 種々の同節要素現象が *PRO* の存在を支持する傍証になりうることを述べた。

3. 見えない／聞こえない語順

前節では発音を持たない代名詞を取り上げ, 言語が必ずしも見たまま, 聞いたままの姿をしているとは限らないことを見た。本節では, その話の続きとして語順の問題を取り上げてみたい。取り上げるのは疑問詞を用いた疑問文, かき混ぜ文, 主語と述語, *be* 動詞を含む文の四つであるが, これらの現象はいずれも普段我々が目にする（耳にする）語順とは異なる, 目に見えない（耳で聞こえない）語順が基になっている。

3.1 疑問詞を用いた疑問文

第 1.3 節で英語の疑問詞疑問文の形成について二つの可能性を挙げた。一つ目は疑問詞が始めから文頭に置かれているというもの, 二つ目は疑問詞が始めは文の別の位置に置かれ, そこから文頭に移動するというものである。本節では, 二つ目のアプローチが言語の実態を反映していることを, 傍証となる現象

を挙げながら述べてみたいと思う。

次の対話から話を始めよう。

(32)A: What are you reading?

B: I am reading a magazine.

話者 A による発言の先頭に置かれている疑問詞 **what** は、文全体が疑問文であることを示していると同時に、動詞 **reading** の目的語としても機能している。これは回答文 (32B) で **what** に対する答えとなる **a magazine** が **reading** の目的語であることから見てとれる。いわば **what** は疑問文の標識と動詞の目的語という一人二役を演じているのである。

疑問詞が元々動詞の項の位置にあることは、次のような例を見るとより一層はつきりする。⁷

(33)A: I bought a... yesterday.

B: You bought what?

対話の中で相手の発言のある部分が聞き取れなかった場合、その部分について問い返すことがままある。上の対話で話者 A の発言の “a ...” の網掛け部分、すなわち動詞 **bought** の目的語部分が聞こえなかったとすると、話者 B はその部分に疑問詞 **what** を置いた文で問い返す。このような疑問文を問い返し疑問文と呼ぶ。この疑問文は疑問詞が述語の項の位置に出現しうることを示す事例である。

疑問詞の移動を支持する別の根拠として、前置詞残留という現象を考えてみよう。(34a) のような文である。

(34) a. Who were you talking **with**?

b. With whom were you talking?

疑問詞に前置詞がついている場合、堅い表現では (34b) のように前置詞と疑問詞全体を文頭に置くが、口語ではしばしば (34a) のように前置詞を残して疑問

⁷ 次の例のように、付加部にある要素が疑問詞となって文頭に現れる場合もある。

(i) {Where / When / How / Why} did you buy those shoes?

話を簡潔にするため、本稿では項位置から移動する疑問詞に限定して話を進める。

詞だけを文頭に置く発話が見られる。このような現象を前置詞残留と呼ぶ。

(34a) の疑問詞と前置詞は隔離されてはいるものの、両者には前置詞とその目的語という文法的な結びつきがある。その証拠に、前置詞を脱落させると文が不適切になってしまう。

(35) *Who were you talking?

問題はこの結びつきがどう保証されるのかという点にある。前置詞とその目的語は自由に結びつけられるのではなく、「前置詞＋目的語」という隣接関係が不可欠である。それが失われる文は不適格になる。

(36) a. John spoke **to Mary** yesterday.

b. *John spoke **to** yesterday Mary.

c. *John spoke Mary **to** yesterday.

翻って (34a) は問題の隣接関係がないにも関わらず適正な文になっている。疑問詞が文頭に直接置かれるという分析では、(36b, c) では認められない隔離関係がなぜ (34a) では認められるのかという問題に対して、原理的な説明を与えるのが難しく、(34a) を例外としなければならなくなる。一方、移動分析では一般性のある説明が可能になる。疑問詞はまず前置詞の後ろに出現し、この環境で「前置詞＋目的語」という隣接関係が成立する。次いで文頭に移動することによって、今度は文全体が疑問文であることを示す標識となる。

疑問詞が元々は文頭以外の位置にあることを示す例をもう一つ挙げよう。次のように疑問詞を含む名詞句の中に再帰代名詞が現れる文がそれである。

(37) **Which picture of himself** does Mary believe [that John tore into pieces]?

この文に現れる再帰代名詞 **himself** は **that**-節の主語 **John** を指している。ここで再帰代名詞の部分に課せられる条件を思い出してほしい。

(38) 再帰代名詞は人称・数・性が一致する先行詞を同じ節の中に持たねばならない。(= (25))

(37) の **himself** は先行詞 **John** がある従属節ではなく、主節の先頭部分に置かれているため、このままでは (38) の条件に違反することになる。それにもか

かわらず文が適正になるのは次の理由による。疑問詞を含む語句 **which picture of himself** は動詞 **tore** の目的語である。したがってこの文は元々次のような構造を持つ。

(39) does Mary believe [that John tore **which picture of himself** into pieces]?

この構造では再帰代名詞 **himself** が先行詞 **John** と同じ節 (**that**-節) の中に留まっていて、再帰代名詞の分布に係る条件 (38) を充足している。

疑問詞が文頭に直接置かれるという分析を採ると、(37) がなぜ (38) の条件に違反しないのかが説明できないだけでなく、次の文がなぜ不適格になるのかも説明できない。

(40) ***Which picture of himself** does Mary believe that Liz tore into pieces after John had cheated on her?

再帰代名詞が先行詞と同じ節の中にあるという点で (37) と (40) は同等である。それにもかかわらず正反対の容認性を示すのはなぜだろうか？移動分析の下では、(40) の不適格性が正しく導き出せる。文頭の疑問詞句を動詞 **tore** の目的語位置に戻した構造を見てみよう。

(41) does Mary believe [that Liz tore **which picture of himself** into pieces] [after John had cheated on her]?

先行詞になる **John** が再帰代名詞 **himself** とは同じ節にはないことが分かる。**That**-節の中にある **Liz** は女性名なので、男性の再帰代名詞との間に一致が成立しない。したがって条件 (38) が充足されず、(40) は不適格になるのである。

3.2 かき混ぜ

語順が入れ替わった文の背後に移動という目に見えない（耳に聞こえない）現象が関わっていることは、何も英語だけに当てはまることではなく、他の言語でも観察することができる。ここではかき混ぜと呼ばれる日本語の現象を使ってそのことを示してみたい。

よく知られているように、日本語は語順の自由度が高い。次の文はどれも日本語として適正な文である。一方、英語では可能な語順が限られている。

- (42) a. ジョンがビルにお金をあげた。(John gave Bill money.)
 b. ジョンがお金をビルにあげた。(*John gave money Bill.)
 c. お金をジョンがビルにあげた。(*Money John gave Bill.)
 d. ビルにジョンがお金をあげた。(*Bill John gave money.)
 e. ビルにお金をジョンがあげた。(*Bill money John gave.)
 f. お金をビルにジョンがあげた。(*Money Bill John gave.)

(42b-f) は (42a) の語順を基にして任意の語句を移動させることによって作られる。このような随意的な移動操作をかき混ぜと呼ぶ。

かき混ぜに関する研究 (Saito 1985, 1989, 1992 など参照) では, この現象が移動を伴うものであることが分かっている。その根拠の一例を紹介しよう。

- (43) a. ジョンは [メアリーが どの服を 買った **か**] 知りたがっている。
 b. *[メアリーが服を買った **か**] 誰が 知りたがっている。

英語とは違って日本語では疑問詞を文頭に出す必要がない。その代わり, 疑問詞は疑問の終助詞が出現する節の内部に置かれなければならない。(43a) では疑問詞句「どの服を」と終助詞「か」が同一節内にあるため, この条件が満たされている。(43b) では「誰が」は疑問の従属節の外, すなわち平叙文である主節に置かれている。このような文は容認されない。⁸ (43a, b) の比較をもとに, 次のような条件を立てることができる。

- (44) 疑問詞は疑問の終助詞が出現する節の内部になければならない。

この条件を踏まえて次の文を検討してみよう。

- (45) どの服をジョンは [メアリーが買った **か**] 知りたがっている。

この文では, 従属節の動詞「買った」の目的語に相当する「どの服を」がかき混ぜによって文頭に置かれている。その結果, 疑問詞と終助詞「か」が別々の節に置かれ, 条件 (44) に違反する構造になっている。にもかかわらず, この文は (43b) よりもはるかに容認度が高い。

⁸ (43b) が適正な文になるためには, 主節も疑問文にする必要がある。

(i) [メアリーが服を買った **か**] 誰が 知りたがっている **の**?

(43b) と (45) の違いは、かき混ぜが移動現象であることを支持する根拠となる。(45) の「どの服を」が本来従属節の述語「買った」の目的語であることに注目して、この句が「買った」の目的語の位置から文頭に動かされたと考えてみよう。すると、(45) は元々の構造として (43a) と同じ構造を持つことになる。注目すべきなのは、この構造では条件 (44) が満たされている点である。一方 (43b) の「誰が」は従属節から取り出されたものではなく、主節の主語として始めから述語「知っていた」の前に置かれているため、条件 (44) を充足することができない。このように、移動分析を用いると、表層的には同じ構造パターンを示す (43b) と (45) が対照的な容認度を示すことに関して、自然な説明を与えることができる。

3.3 主語はどこにある（あった）か？

主語と言えば (46) の *the boys* のように概して文頭（付近）に置かれる成分と考えられているが、「(46) が実は (47) のような語順を基にしてい、*will* の後ろにある *the boys* を *will* の前に動かすことによって作られる」と聞いたら、みなさんは信じるだろうか？

(46) *The boys will write a book.*

(47) *will the boys write a book.*

既に見た英語の疑問文や日本語のかき混ぜ文ならば、文頭に現れる語句が元々は別の場所に置かれていて、そこから文頭に動かされたのだと言われても、感覚的に納得できる部分が多いかもしれない。だが、(46) が (47) のような奇妙な語順から導き出されていると聞くと、当然様々な疑問が湧いてくるだろう。素直に (46) のような文を作ればよいのに、なぜ (47) から派生させるという回りくどいことをする必要があるのか？(47) のようなありもしない語順が本当に必要なのか？本節ではこれらの疑問に答えることを通して、文の主語のステイタスについて考えてみたい。

(46) のケースを考える前段階として、英語の受動文の作り方に触れておきたい。受動態を習ったときに、能動態との対応関係に基づいた説明を受けたことがある人が多いと思う。一般的な文法の参考書でも、「能動態の主語は前置詞 *by* の目的語になって文末に移動し、代わって能動態の目的語が主語の位置に来る」（綿貫他 2000:566）という記述にみられるように、受動文の主語が能動文の目的語に対応しているという説明がなされている。

本稿の枠組みに置き換えると、この対応関係は名詞句の移動というプロセス

に還元される。すなわち、受動文の主語は始めから文頭にあるのではなく、例えば (48a) の John のように始めは過去分詞の直後に置かれ、そこから be 動詞の前に動かされて受動文 (48b) が出来上がるのである。

(48) a. ____ was criticized **John**.

b. **John** was criticized ____.

こうした移動が実際に起こっていることを確かめる術として、結果構文と呼ばれる構文を使ったテストがしばしば用いられる。結果構文とは、(49) のようなある行為の結果としてその行為の参与者（つまり述語の項）に何らかの変化が生じることを表す構文である。

(49) John hammered the metal flat.

この文は、金属を叩いた (hammered the metal) 結果、その金属が平らに (flat) になったという意味である。Flat はその前にある名詞句 the metal が変化した状態を叙述しているので「結果述語」と呼ばれる。

結果構文には直接目的語制約 (Direct Object Restriction) と呼ばれる制約が課される。

(50) 直接目的語制約

結果述語は動詞の直後に置かれた名詞句を叙述する。⁹

この制約によって排除されるのは次のようなケースである。

(51) a. ***Dora** shouted hoarse. [意図的行為を表す自動詞の主語]

b. ***I** ate the food full. [他動詞の主語]

c. *John loaded the hay into **the wagon** full. [前置詞の目的語]

((51a) Levin and Rappaport Hovav (1995: 35); (51b) Simpson 1983: 144); (51c)

⁹ 参考までに、この制約を論じている Levin and Rappaport Hovav (1995) による説明の文言を引用しておく。

(i) Direct Object Restriction (Levin and Rappaport Hovav 1995: 34)

[A] resultative phrase may be predicated of the immediately postverbal NP.

Williams (1980: 204))

上に挙げた例ではいずれも太字の要素は動詞の直後の位置にはない。これらは結果述語（下線部分）によって状態変化を叙述することができない。

ところが受動文の主語は結果述語と結びつけることが可能である。

(52) **The metal** was hammered flat.

直接目的語制約を考慮すると、この文が適正であることは、受動文の主語が始めから **be** 動詞の前にあるのではなく、元々は過去分詞の直後の位置に現れることを意味する。

(53) was hammered **the metal** flat.

この構造で直接目的語制約が充足され、結果述語による叙述が可能になる。しかる後に **the metal** が **was** の前に移動することによって受動文が出来上がるのである。

受動文が主語の移動を伴うことを念頭において、今度は (54a) がどのようにして作られるのかを考えてみよう。(54a) では角括弧で括られた部分が **and** によって等位接続されていて、(54b) と同じ意味を表す。

(54) a. **The boys** will [write a book] and [be awarded a prize for it].

(Burton and Grimshaw 1992: 307)

b. The boys will write a book and the boys will be awarded a prize for it.

(54a) の前の部分 **write a book** は能動態であり、後ろの部分 **be awarded a prize for it** は受動態である。受動態の主語は過去分詞の直後の位置から文頭へと移動する。すなわち、(54) は次のようなプロセスを経ていることになる。

(55) **The boys** will [write a book] and [be awarded a prize for it].



しかしながら、このような分析には問題があることが指摘されている。¹⁰ (55) のような移動は「等位構造制約」と呼ばれる一般原理に違反しているのである。

¹⁰ Burton and Grimshaw (1992) および McNally (1992) らの論文を参照のこと。

(56) 等位構造制約

等位接続された要素の一方だけを移動させることはできない。

例えば、次の (57a) では **and** の前の等位項 (=等位接続された要素) のみから **which book** が抜き出されて文頭に移動しているが、このような文は不適格となる。対照的に、それぞれの等位項から **which book** を抜き出す (57b) のような構造であれば適正な文となる。

(57) a. ***Which book** did they say that [the boys wrote] and [the girls did the illustrations]?

↑

b. **Which book** did they say that [the boys wrote] and [the girls illustrated]?

↑

(Burton and Grimshaw 1992: 306)

これを踏まえると、(54a) は (55) のような構造ではなく、**and** の前の等位項からも **the boys** が抜き出された (58) のような構造をしていることになる。

(58) **The boys** will [write a book] and [be awarded] a prize for it].

↑

つまり、**the boys** は受動態過去分詞の直後の位置からだけでなく、同時に能動態の他動詞 **write** の直前の位置からも抜き出され、助動詞 **will** の前に移動するのである。等位接続詞の前の部分に注目してみよう。これまでの話を踏まえると、この部分は元々 (59a) のような構造をしており、そこから **the boys** を移動させることによって (59b) の構造ができるということになる。

(59) a. will **the boys** write a book.

b. **The boys** will write a book.

この (59b) は (46) と同じ文であり、(59a) の構造は (47) と同じである。

3.4 Be 動詞は本動詞か助動詞か

最後に動詞の位置について考えてみたい。英語の動詞には本動詞と呼ばれるグループと助動詞と呼ばれるグループがある。次の文の **visit** は本動詞, **will** は

助動詞である。

(60) John will visit Bill.

本動詞と助動詞の区別は単に名称だけのものではない。この二つのグループの動詞はいろいろな点で異なる文法的特徴を示す。ここでは統語研究で用いられる下記の基準を使って両者の判別を試みる。

- (61) a. 後続要素の品詞や形式は何か。
 b. 疑問文で主語と倒置できるか。
 c. 否定辞 **not** が直接付くか。
 d. 付加疑問で使えるか。
 e. 後続部分を省略できるか。

まず、次のデータ群を比較して、助動詞と本動詞の後続要素がどのような形をとっているのかを見てみよう。

- (62) a. John **will** { criticize / *criticism / *critical / *critically } Bill.
 b. John **should** { criticize / *criticism / *critical / *critically } Bill.
 c. John **didn't** { criticize / *criticism / *critical / *critically } Bill.

- (63) a. John **criticized** Bill.
 b. John **thought** that Bill was wrong.
 c. John **looked** at Bill.
 d. John **looked** innocent.

(62a-c) から明らかなように、助動詞は必ず動詞を必要とし、動詞が欠落している文は不適格になる。それに対して、(63a-d) にある本動詞の場合は、例えば **criticize** は名詞を、**think** は節を、そして **look** は前置詞を、というように、個々の動詞によって後続要素の品詞や形式が異なっている。さらに、**look** のように一つの動詞が複数のタイプの後続要素と結びつくこともある。

次に、倒置ができるか否かを検討する。**Yes-no** 疑問文を作ることを考えてみよう。助動詞が主語の前に置かれる（すなわち倒置が起こる）のに対して、本動詞と主語を倒置させることはできない。

- (64) a. John **will** criticize Bill.
 b. **Will** John criticize Bill?

- (65) a. John **criticized** Bill.
 b. ***Criticized** John Bill? (cf. Did John criticize Bill?)

第三の基準は、否定辞 **not** の付き方である。否定辞は助動詞に直接付いて否定文を作る。一方、本動詞を含む文では否定辞は動詞に直接付くことはなく、必ず助動詞を必要とする。

- (66) a. John **will** not criticize Bill.
 b. *John **criticized** not Bill. (cf. John did not criticize Bill.)

第四の基準は、付加疑問の可否である。付加疑問を作る際には助動詞が使われ、本動詞が使われることはない。

- (67) a. John will criticize Bill, **won't** he?
 b. *John criticized Bill, **criticizedn't** he? (cf. John criticized Bill, didn't he?)

第五の基準は、後続部分の省略の可否である。Yes-no 疑問文 (68) に対する返答となる (69a, b) を考えてみよう。

- (68) Can you speak French?
 (69) a. Yes, I can ~~speak French~~.
 b. *Yes, I can speak ~~French~~.

Yes-no 疑問文に対しては、通常助動詞までを残してその後続部分を省略した (69a) のような形で回答する。(69b) が不適格な文になっていることから分かるように、こうした後続部分の省略は、本動詞では不可能である。

これまで見てきたように、本動詞と助動詞の間にははっきりとした文法的な違いが存在する。これを踏まえて、次の文に出てくる **is** のステイタスを考えてみよう。

- (70) John **is** honest.

この文はいわゆる五分型の中の SVC 文型に該当する文である。先に挙げた五つの基準に照らし合わせると、この構文に現れる **be** 動詞が本動詞と助動詞の両方の性質を持っていることが分かる。

- (71) a. John **is** { honest / a student / against the plan }.
 b. Her idea **was** { for us to leave / that we should leave }.
 c. **Is** John honest?
 d. John **is** not honest.
 e. John **is** honest, **isn't** he?
 f. **Is** John honest? — Yes, he **is** honest.

SVC 構文の **be** 動詞は、後続部分の品詞や形式に関しては本動詞として振る舞う。(71a, b) が示しているように、形容詞、名詞 (句)、前置詞 (句)、不定詞節、*that*-節など、多種多様な要素をとることができるからである。一方、(71c-f) のデータを見ると、倒置、否定、付加疑問、省略に関しては助動詞と同じ特徴を示すことが分かる。

SVC 構文に現れる **be** 動詞のこのような二面性は、例えば “What did you buy?” のような疑問文で疑問詞が一人二役、すなわち述語の目的語としての役割と疑問文標識としての役割を演じているのに似ている。そこで、疑問詞の一人二役が移動というメカニズムに根差しているのと同様に、**be** 動詞の二面性も移動によってとらえられるのではないかという予測が成り立つ。以下ではこの予測を検証してみよう。

まず、助動詞と本動詞の位置関係を見てみよう。両者が異なる位置を占めていることから、文の構造には助動詞のための位置 (Aux) と本動詞のための位置 (V) があると考えられる。¹¹

- (72) John will visit Mary.
 Aux V

SVC 構文の **be** 動詞は本動詞と助動詞の一人二役であるから、始めに (73a) のように本動詞の位置に置かれ、次に (73b) のように助動詞の位置に移動すると考えてみよう。

¹¹ Aux は auxiliary verb (助動詞) を、V は verb (動詞) を略記したものである。

(75) a. *John will **be** not a teacher.

b. *John will **be** a teacher, **ben't** he?

ここまでの話をまとめると次のようになる。本動詞と助動詞が示す文法的な違いはこれらの成分が現れる文の構造上の違いを反映している。SVC 構文で使われる **be** 動詞は本動詞と助動詞の両方の特徴を備えているが、それはこの動詞が始めに本動詞の位置に現れ、続いて助動詞の位置へと移動することに起因する。“John is innocent.” のような文では **be** 動詞の移動が起こっているか否かは直ぐには判らないが、他の助動詞や否定辞との共起関係を手がかりにしてその移動を可視化することができる。

4. 結び — 見えない／聞こえないものを探知するということ

本稿では、言語には発音されない語や発音に反映されない語順が存在することを見てきた。前者の例として不定詞の意味上の主語となる無形代名詞 **PRO** を取り上げ、その存在が視覚や聴覚ではとらえられなくても、述語と項の意味関係のあり方を決定する文法原理である θ 基準から導き出されることを論じた。さらに、**PRO** の存在が同節要素現象と呼ばれる現象によって間接的な裏付けを得られることも見た。後者の例としては、様々な移動現象を取り上げた。移動が適用される要素はいわば一人二役の特徴を示す。例えば、疑問文の先頭に置かれた疑問詞は文が疑問文であることを示す役割と、述語の項や付加部としての役割を持つ。また、SVC 構文に現れる **be** 動詞は、本動詞および助動詞の両方の役割を兼ね備えている。こうした二つの役割は、当該要素が表層の位置だけでなく、発音には反映されない別の位置にも生起することを意味する。

存在するものイコール五感で知覚できるもの、という日常的な感覚からする

ある。次の (ia) のように助動詞 **would** を残して省略することもできるが、(ib) のように **be** を残した省略も可能だからである。

(i) John would be a vegetarian, and ...

a. Mary would ~~be a vegetarian~~, too.

b. Mary would ~~be a vegetarian~~, too. (浅川・鎌田 1986: 29)

助動詞のみが後続部分の省略を許すと考えると、このテストに限っては (ib) の **be** は助動詞と見なされるため、この文には **would** と **be** の二つの助動詞が存在することになる。このような立場を採るべきか、それとも (ib) の **be** をあくまでも本動詞と見るべきか、はたまたこれ以外の分析をすべきかは議論の余地のある問題である。

と、発音に反映されない語や構文の存在を直接実感することは難しく、そういうものが存在するというのは荒唐無稽に響くかもしれない。だが、五感だけでは知覚できないものを想定して理論を立てること、すなわち抽象化を行うことで、人間は自分たちを取り囲む世界の実態や仕組みを解明してきた。同時に、直接得られるデータと一般原理を組み合わせ、直接知覚できない事象や仕組みを間接的に可視化することによって、立てた理論の妥当性を保証してきた。言語学における文法研究もまた、普段は実感できない原理や体系を抽象化と可視化によって探り当て、それを正確に炙り出す営みなのである。

References

- Burton, Strang and Jane Grimshaw (1992) "Coordination and VP-Internal Subjects," *Linguistic Inquiry* 23: 305-313.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- McNally, Louise (1992) "VP Coordination and the VP-Internal Subject Hypothesis," *Linguistic Inquiry* 23: 336-341.
- Saito, Mamoru (1985) "Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications." Ph.D. dissertation, MIT.
- Saito, Mamoru (1989) "Scrambling as Semantically Vacuous A'-Movement." In M. Baltin and A. Kroch (eds.) *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, 182-200, Chicago, Ill.: University of Chicago Press.
- Saito, Mamoru (1992) "Long Distance Scrambling in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 1: 69-118.
- Simpson, Jane (1983) "Resultatives." In L. Levin, M. Rappaport, and A. Zaenen (eds.) *Papers in Lexical-Functional Grammar*, 143-157, Bloomington, Ind.: Indiana University Linguistics Club.
- Williams, Edwin (1980) "Predication," *Linguistic Inquiry* 11: 203-238.
- 浅川照夫・鎌田精三郎 (1986) 『助動詞』(新英文法選書第4巻) 東京: 大修館書店
- 綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚弘 (2000) 『ロイヤル英文法』(改訂新版) 東京: 旺文社

Keywords: 無形代名詞 PRO θ 基準 同節要素 移動